

小学生の野球に携わって学んだこと

—その4「遊び」がひとの可能性を広げる—

三浦捷也

(三浦歯科医院 院長)



私は戦後間もない70数年前に小学生時代を過ごした。当時はスポーツ少年団も、学習塾も、「お稽古ごと」にも縁遠い生活環境だった。「勉強、勉強」「勝て、勝て」と尻を叩く教育熱心な親も、子どもの遊びに干渉する大人たちも少なかったように思う。家の周りにはいたるところに広場や空地があり、仲間と誘い合い、日が暮れるまで夢中になって動き回っていた。

私と野球との出会いは小学生時代の「遊びとしての野球」、つまり「三角ベース」だった。時には夢中になり過ぎ、言い争いや、擦り傷も絶えなかった。でも、大人の目を意識せず、親に管理されることもなく「年齢の差」や「上手、下手」を越え、全員で三角ベースを楽しんだ。投げる、捕る、走るなどを通して自然に手先の小さな動きから全身の動きまで身についたように思う。今のように管理する大人が居なかったのに、大怪我の話も聞いたことがない。きっと遊びのなかから手加減の度合いや、子ども同士で危険回避のルールを身につけていたのだろう。

「親はなくとも子は育つ」という諺がある。親がいなくても、あるいは親から手取り足取り面倒見られなくても、子どもは心身ともに一人前の人間に育つということなのだろうが、更にそこには親以外の多くの人々との触れ合いのなかでという意味も込められているように思える。子どもの心と体を育てたのは地域社会であり、とりわけ、ガキ大将を中心とした子ども集団の存在が大きかった。乳幼児期が過ぎ、親もとから離れ、子ども集団に入ると、自然の中での遊びや、地域の行事など豊かな子ども文化の世界

が広がっていた。ここにはコミュニケーション能力を含め、人格発達の面でも人となるための時間と空間があった。

一人遊びや家でのゲームでは得られない友だちとのつながりのなかで、集団生活の基礎を学び、更には、自己を伸ばし、広げ、開化させる無限の深さがあった。

群として生きる人間にとって大切な「みんなと仲良く助け合うこと」「自分で考え判断し、自ら行動すること」が遊びのなかから、いつの間にか自然に心のなかに刻み込まれていくのだろう。当手を振り返り、そんな印象を強く持つ。

追いつき、追い越せと子どもの尻を叩く点取り世相、勝つことを至上と吹き込むスポーツ界のなかで、私の小学生時代の体験をそのまま今の社会に復活させることが不可能であることは充分理解している。おそらく今後もこうした社会環境は決して絶えることはないであろう。

たとえそうであっても、幼い時から親に育てられ、師に導かれ、友と遊び、更に40年間子どもたちとの野球を通しての体験は簡単には譲ることはできない。夢多い、未来ある、かわいい子どもたちのために、社会の風潮にのみこまれず、これからもしっかりと主張し続けようと思う。

— 「遊び」に対する識者の提言 —

○元陸上選手、スポーツ指導者：為末 大氏

▷遊びながら学び、学びながら遊ぶ。僕自身のプロセスを振り返ると、面白いからやっていることが自然に学びにつながっていた。▷ハードル競技も読書も「遊びのなかから始まって」なのだ。▷遊びを共有すると距離が縮まる。



▷遊びは自由である。▷遊びは楽しい。そう、「遊ぶが勝ち」なのだ。「遊び」も「スポーツ」も本来、自発的行為なのだ。そうでなければ「遊び」も「スポーツ」も、あんなに楽しいはずがない。同じような視点をスポーツ界が取り入れていくことになれば、選手の育成方法も、コーチと選手の関係も、そして、暴力による「体罰」についても、必ず変化していくだろう。子どもたちが、自分の身体を自由に動かして遊ぶ空間・時間すら手に入れにくいとすれば、重大な問題ではないだろうか。「遊ぶことが、ひとの可能性を広げてくれる」(著書「遊ぶが勝ち」より抜粋)

○児童精神科医：佐々木 正美氏

先生は著書「子どもの心はどう育つのか」のなかで、多くの事例を挙げ、「子どもの遊びと社会的人格」について次のように語っている。

「要するに、子ども時代に多くの遊びを豊かに経験しておくことが、倫理観や道徳観を育て、規則を遵守し、役割や責任を果たすという社会的ルールを尊重する社会人になるために必要な基礎的要件である」「遊びを十分経験することなしには、健全な社会人になれないのです。現実には不登校と言われる子どもたちは、こういう意味での遊びの体験が特に不足していると思います」

○医学博士：武藤 芳照氏

子どもたちの「あそび」は、からだと心の成長にとって、必要不可欠なものである。とくに幼い頃に行うお手玉、ケン玉、めんこなど道具を用いた遊び、ゴムとび、鬼ごっこなどの外遊びには、子どもが身につけるべきからだの基本的動作(身のこなし)や、からだの発達に必要な強さの運動が含まれている。

本格的な野球とはほど遠い「三角ベース」は子どもたちのやり方であそびとして行っているわけです。運動不足の少年たちも、スポーツ少

年たちも、本質的には、あそびが不足していることから、さまざまなからだと心の問題をきたしてきたのではないか。つまり、あそびを見直すことが、今起きている現代の子ども問題を解決する有効な手だてになろう。(著書「子どもの健康と楽しい運動」より抜粋)

○家庭裁判所調査官：佐々木 光郎氏

家庭裁判所の調査官として「非行臨床」とかわり30年。非行や問題行動をした少年少女と向き合ってきた佐々木光郎先生(元静岡英和学院大教授)は地域の講演会で、「すべての事例についてといってよいほど共通していたのは、彼らが『ごっこ遊び』の体験がなかった」と語っていた。体験を通しての先生の遊びに対する提言は説得力があり無視出来ない。



子どもの周囲を見回すと、思いやりの欠如、いじめ、ひきこもりなど、さまざま社会問題としてクローズアップされている。子どもの問題と「遊び」との関係については、私自身子どもたちとの野球を通して、多くを体験した。

その理由がどうであれ、子どもから遊びを奪い、目先の結果や勉強へと追いやるのが、子どもの世界を狭め、健康的成長を妨げ、子どもの育つ力を悪化させているという印象が強い。

本来、子どもの自由な意思とやり方で行われるスポーツに大人がかかわりすぎている。そのため子どものスポーツが必要以上に本格化し、お金もかかるようになり、親への負担も大きくなっている。その一方で、楽しみとしてスポーツを行っている子どもたちに過大な心理的ストレスを与えると、それだけでスポーツそのものを嫌いにさせ、スポーツから遠ざけてしまう結果にもなる。

大人になるには「遊び」が必須の条件とする識者の提言に、今一度耳を傾ける必要がある。